



西小校長室だより

令和7年度 11月号

(文責 妹尾)

いきいき発表会

11月15日(土)にはお家の方々や地域の方々、地域学校運営協議会の方々をお招きし、これまで子どもたち



が学んできた成果を発表する「いきいき発表会」を開催しました。前日には全校児童が互いに刺激をもらい、自分たちの学びの価値をさらに高めるために校内発表会も行いました。

西こども園の園児たちも最前列で見学し大きな拍手を送ってくれていました。

にここに学級・わくわく学級のあいさつと太鼓に始まり、1年生から6年生まですべての子どもたちが、国語や総合的な学習の時間などで取り組んだ物語や題材を一生懸命に発表しました。

学習発表会は演劇や音楽、ダンスなどのコンクールではありません。完成度や出来栄えと同等に大切なのが、当までの学びのプロセスです。それを自分なりに、また自分たちなりにかみ砕いて表現したのがこの日の発表会でした。おそらく保護者の皆さんは、家でも繰り返し練習する我が子の姿を思い浮かべながら見ていただけたのではないかと思います。

私には発表を終えて体育館を出ていく子どもたち一人一人の、やりきってホッとしたような、満足感に満ちたような顔がとても印象的でした。急な発熱や事情により当日は来られなかつた人もいますが、先に述べたように、ここまで

セスが一番大事ですから、みんなが一緒に完成させた発表会でした。手前味噌ですが、本当に素晴らしい発表だったと思います。みなさん、お疲れ様でした。

宿泊体験研修

10月22日(水)から、5年生が江津市にある島根県立少年自然の家で2日間の宿泊研修を行いました。事前には4つに分かれたそれぞれの班が、この研修に対する意気込みを発表し、自分たちのめあてを確認し合いました。この研修は楽しい旅行とは違い、自分を磨く場

【※西小ホームページのアーカイブを抜粋・加筆しています】

であり、自分を鍛える場もあります。楽しい中にも普段には味わえない厳しさを自分に課し、また友だちの存在を再確認できる機会にもなります。

初日には火起こし体験を皮切りに課題解決型ゲームや冒險の森、キャンドルの集いなどを行いました。グループ内の協力体制が求められるプログラムの中で各々が自分の色を出しながら全力で取り組みました。キャンドルの集いの中でもらった「4つ(自律・協力・責任・挑戦)の火」を、今後も絶やさず自身の中で燃やし続けてほしいと思います。



2日目は、放射冷却効果で冬を思わせる寒さとなりました。研修が深まるにつれ、周りの状況を自分で判断して活動するという本研修の目標の姿が徐々に見られるようになりました。この日の主な活動は野外炊飯です。2班合同でチームを組み、3つの係(かまどで火をおこす係、羽釜でご飯を準備する係、肉野菜等を切ってカレーを作る係)に分かれて活動しましたが、両班ともまさに「協力」「責任」の力がしっかりと發揮されました。予定より30分以上も早く完成し、見た目も味も完璧なカレーライスができました。また最後のプログラムの「カブラ」でも班で力を合わせながら作品作りに挑む姿が随所に見られました。この2日間で得た貴重な体験を今後の生活にしっかり活かしてほしいと思います。



授業公開日 & PTA研修会

10月16日(木)の授業公開日にはたくさんの保護者にお越しいただき、全学級が人権にかかわる授業を公開しました。道徳や学活、社会科(同和問題学習)などの教科・領域において、互いを思いやりながら生活することや、より人間らしく生きること、より楽しい気持ちで過ごすことなどを考える学習が展開されました。



その後は体育館に場所を移し、学校保健委員会・PTA研修会を開催し、島根大学人間科学部の宮崎亮先生より講演をいただきました。保護者だけでなく5・6年生児童も参加し、「きみの中の集中力モード」をオンにしよう！大作戦と題した話を聞きました。集中力を上げるためにには時々立って作業（軽い運動）をすることに優位性があることを教えてもらいました。途中には集中力に関するクイズがあつたり、実際に参加者も一緒に動いてみたりと、追随体験をしながらの講演となり、みんな笑顔でリフレッシュしました。授業中にこの動きを取り入れるAB(Active Breaks)プログラムを、本校でも一緒に研究を進め、子どもたちの集中力アップにつなげていきたいと考えているところです。

西こども園との焼き芋交流

11月13日(木)に、1年生が西小学校に隣接する西こども園に行き、一緒に焼き芋を食べました。こども園と小学校がそれぞれ栽培したサツマイモを使って、新



聞紙やアルミホイルに包み準備をしました。1年生は小学校では一番下の学年ですが、こども園に行けば上學年になります。園児をリードしながら作業に取り組む姿を見ていると、何かほっこりとした気持ちになります。しゅんじゅ会の皆さんのが焚き床を作ってくれたり、子どもたちは準備した芋を投げ入れました。焼き上がるまでの時間は、園児と「かもつ列車」などのゲームで盛り上がりました。そのうち、だんだんいい匂いがしてきます。

ホッカホカの焼き芋を口いっぱいに頬張り、「しあわせ～」「さいこう～」とおしゃべりしながら嬉しそうな顔を見せてくれました。芋の皮をむいてあげたり、中には食べさせてあげたりと、学校では見られない交流の姿がありました。自尊感情も高まる活動になりました。

校長所感 ~学び・学力~

慶應義塾大学の今井むつみ氏(認知心理学・発達心理学専門)が中心となり、広島県教育委員会と共同で開発された「たつじんテスト」が、今年度より島根県で本格実施されました。本校でも7月に実施しています。子どもが教科を学ぶ前に、学びの土台となる認知能力を確認し、学びのつまずきを教師が指導に活かす目的で行うテストです。

書籍「学びとは何か」「ことばと思考」の著者である今井氏が著書「学力喪失」の中で、多くの子どもたちが「**学習性無力感**」に陥っていると述べられています。現

状として、数という概念を根本的に誤って理解していたり、大事な言葉や概念を知らないために問題文を誤読したりする子がたくさんいます。そのような子は上の学年または中学生になっても、基礎的な概念が理解できていない状態で、授業はどんどん進むのです。学習者は、いくら学習を続けても自分はもう分かるようにならない、と思ってしまっているのです。

また、文字に書かれていらない情報を補って理解する、いわゆる行間を埋めることができない子の多さも指摘されています。例えば「14人の子どもが1列に並び、自分の前に7人います。後ろには何人いる？」という問題に「14-7=7人」と答えた3~5年生の多さです。問題文には書かれていらない自分の数を除外していません。立式した途端に概念が理解できなくなっているのです。

今井氏の論を借りれば、大人がもつ「教えることで知識は頭に入れられる、分かりやすく繰り返し教えれば学び手は理解する」という教育観こそに誤解が生じているのかもしれません。すると**子どもは、知識は自分でつくっていくものではなく、効率よく教えてもらえるもの**と思ってしまうのでしょうか。また教師の側も、子どもたちが活発に手を挙げ、たくさん発言していれば主体的だと勘違いしている場合が多々あります。自分で生み出す「生きた知識」は、言葉や数などの概念が自分のスキーマ(考え方の枠組)に当てはまったときによく得られるのだと思います。そのためには、**感情が揺さぶられる体験をたくさん経験することが重要**になってくるのだと思います。



「学び」という側面を違う角度から考えてみます。幼児期に子どもが泣くという行動は、悲しいときだけに見られるのではなく、寂しかったり辛かったりして、自分でも何とかしようと頑張っているけど、どうにもならず涙が出てしまうときもあるのだと思います。また甘えたい欲求を抑えきれず泣いている場合もあるのではないでしょうか。それを大人が勝手に「かわいそう」と決めつけ、すぐに助け船を出し自分の価値観で対応してしまうと、その子の学びの機会や独自のスキーマ形成の機会を奪ってしまうことになります。不安な気持ちや悔しい気持ち、甘えたい気持ちなどを整理するための大切な行動を止めてしまうことにもなり兼ねません。

子どもにとって泣くということも大切な表現の1つであり、泣くこと(上の学年では泣くというより落ち込むこと)にも意味があると受け止める姿勢が必要だと思います。もちろんただ放っておくのではなく、その背景を把握することも重要です。

学校において、学ぶことや学力が、自律に向かう助けになり、「生きる力」となってくれることが、一貫して私の願いです。家庭教育においては、保護者のみなさんそれぞれの教育観があると思います。正解があるわけではありません。ぜひいろいろお聞かせ願いたいと思っています。

学校のホームページの「児童の様子」を日々更新し、子どもたちの様子をお伝えしています。どうぞご覧ください。